

Title	Ovarian Cancer Incidence and Survival by Histologic Type in Osaka, Japan
Author(s)	井岡, 亜希子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43912
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	井 岡 亜 希 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学位記番号	第 17690 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科社会医学専攻
学位論文名	Ovarian Cancer Incidence and Survival by Histologic Type in Osaka, Japan (組織型別に見た大阪府の卵巣がん罹患率と生存率の動向)
論文審査委員	(主査) 教授 津熊 秀明 (副査) 教授 森本 兼曩 教授 青笹 克之

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

卵巣がんは、わが国において女性のがん死亡の 3.4-3.9%を占め、近年増加の傾向にあるが、罹患率と生存率の動向については未だ明らかにされていない。また卵巣がんは組織型が多様である為、組織型別に動向を分析する必要があるが、これまでわが国では系統的に分析されたことが無かった。本研究では、大阪府がん登録資料に基づき、組織型別に卵巣がんの罹患率と生存率の動向を分析し、それら成績を米国と比較することを目的とする。

〔方 法〕

1975 年～1998 年までに大阪府がん登録に登録された 7,167 人を対象とした。但し生存率は、診断から 5 年目の予後調査が完了している、1994 年診断年までの大阪府下在住届出患者（大阪市を除く）2,431 人を対象とした。組織型は、国際がん研究所 (IARC) が国際比較研究のために作成したグループ分類を用い、再分類した。すなわち、carcinoma、sex cord-stromal tumors、germ cell tumors、other specified cancers、unspecified cancer の 5 分類である。なお、unspecified cancer は全卵巣がんの 34.9%を占めるため、組織型別の罹患率の分析では、unspecified cancer の対象者を年齢と診断年を用いて他の組織型のカテゴリーに按分した。

〔成 績〕

23 年間に卵巣がん年齢調整罹患率（標準人口は世界人口）は 4.0 から 5.4（10 万人対）に増加した。また、卵巣がんの 91.2%を占める carcinoma でも 3.4 から 4.8 の増加を認めた。Carcinoma においては、serous carcinoma の増加が mucinous carcinoma に比し著しかった。一方、sex cord-stromal tumors では 1980 年以降罹患率が減少しており、germ cell tumors ではほぼ一定であった。罹患率は、germ cell tumors 以外では年齢とともに増加したが、germ cell tumors では 15 歳～24 歳で最も高かった。

卵巣がんの 5 年実測生存率は 35.2%であった。組織型別では、carcinoma は 37.0%、sex cord-stromal tumors は 53.9%、germ cell tumors は 58.3%であり、carcinoma の 5 年実測生存率は germ cell tumors に比べて有意に低か

った (log rank test : $p < 0.01$)。また、carcinoma において、mucinous carcinoma の 5 年実測生存率 (59.0%) は、serous carcinoma (38.5%) に比し有意に高かった (log rank test : $p < 0.01$)。

同年代同年齢の日本人一般人口における期待生存確率で調整した卵巣がんの 5 年相対生存率は 36.4% で、組織型別には、carcinoma 38.3%、sex cord-stromal tumors 55.3%、germ cell tumors 58.6% であった。米国の卵巣がん患者の 5 年相対生存率と比較し低値であった (36.4% 対 43.5%) が、その差は carcinoma で小さく (38.3% 対 42.4%)、sex cord-stromal tumors (55.3% 対 72.9%)、germ cell tumors (58.6% 対 83.7%) で大きかった。1975-1984 年と 1985-1994 年診断患者の 5 年相対生存率を比較すると、卵巣がん (29.1% から 40.9%)、carcinoma (30.9% から 42.1%)、germ cell tumors (46.9% から 69.8%)、mucinous carcinoma (51.2% から 66.3%) において有意に増加していた。

[総括]

23 年間に卵巣がん年齢調整罹患率は 4.0 から 5.4 (10 万人対) に増加した。この増加は carcinoma の増加 (3.4 から 4.8) に起因していた。先行研究にて、卵巣がんの危険因子として出産数の低下、予防因子として経口避妊薬の服用が報告されており、本結果には、日本における出産数の低下と普及率の低い経口避妊薬の関与が考えられた。

卵巣がんの 5 年相対生存率は米国に比べて低く、carcinoma、sex cord-stromal tumors、germ cell tumors においても同様であった。これに影響を与えるものとして、年齢、診断時進行度、carcinoma の組織亜型の分布の相違が考えられた。先行研究では、日米における精巣がん患者の生存率差に、有効な化学療法の実施の遅れの可能性が示唆されているが、卵巣の germ cell tumors の生存率差でも同様の関与が考えられた。

日本における卵巣がん年齢調整罹患率の増加と、米国に比べて低い日本の卵巣がんの 5 年生存率を認めた。本研究の結果は、卵巣がん患者全体の生存率向上のため、卵巣がんの生存率に影響する医療側の要因をさらに明らかにすることの重要性を示している。

論文審査の結果の要旨

本研究は、わが国における卵巣がん罹患率と生存率の動向を初めて組織型別に分析し、それら成績を米国と比較したものである。1975 年～1998 年まで大阪府がん登録に登録された 7,167 人を対象とした。23 年間に卵巣がん年齢調整罹患率は増加し、その増加は carcinoma、とりわけ serous type の増加に起因していることを明らかにした。また、卵巣がんの 5 年相対生存率は米国に比べて低く、その差は、carcinoma では比較的小さく、sex cord-stromal tumors、germ cell tumors で大きいことを確認した。本論文は、わが国の卵巣がん対策を考える上で示唆に富む研究であり、学位に値するものとする。